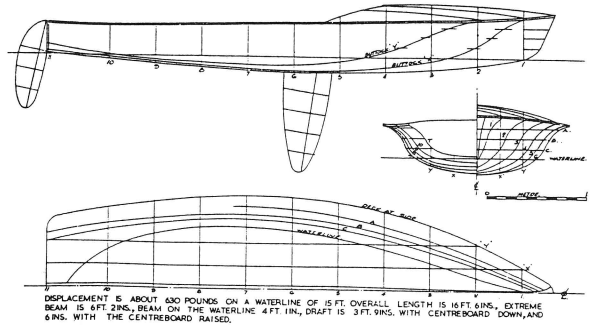
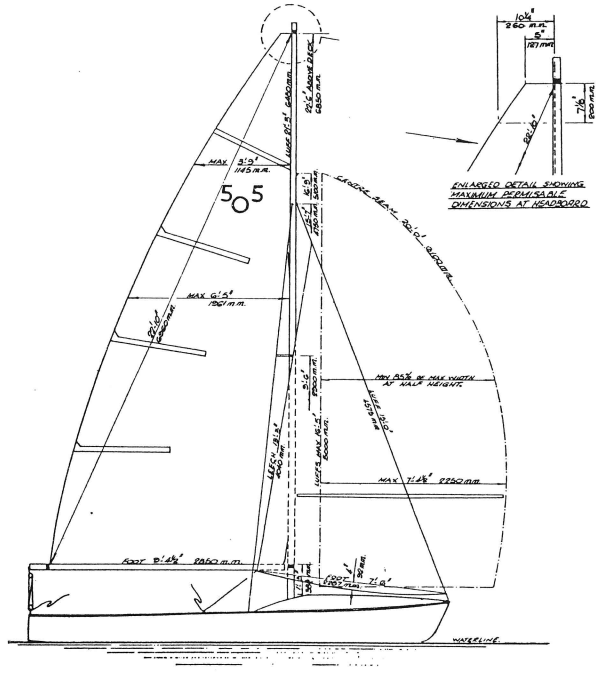
505 MARINADELREY WORLD PREVIEW

ヨットと一言で呼んではいても実際に海に散る帆や船の格好をみるとそれぞれに特徴があり数えきれないほどの艇種に驚かされる。その中で、メインセールに<505>のマークがあり、大きくてパワフルなスピンネーカーを装備しているのが今回江の島ヨットハーバーにて世界選手権を開催する国際５０５級なのである。５０５はIYRU（国際ヨット競技連盟）に公認されており、国際的にも盛んにレース交流を行っている。第１号艇が進水してから３０年以上の歳月がながれ、日本に上陸してからでも１５年が過ぎようとしているが現在世界では8000艇以上が普及しており、世界各地を転戦している世界選手権も今年で３０回を迎える。

キャビンを持ち、外洋へ帆走できる艇種を総称してクルーザーと呼んでいるが、５０５はディンギーとよばれる小型の沿岸プレジャーボートである。わかりやすく車を比較例として考えるとクルーザーは高速バスで５０５はサーキットを走るＦ１レーサーといったところでだろうか。全長５０５ｃｍの美しい艇体を少しでも速く走るためにフィッティングに工夫し、次々と新しいシステムを考えだしていくー若者から６０才を越えるベテランセーラーまでもが楽しめるヨットなのであるが、初心者がヨットを覚える艇種ではなく、ヨットをより深く理解するためのマシーンなのである。





【５０５誕生】

1952年にIYRUのオリンピック艇種２人乗り艇のコンクールに18ftのCoronetで応募した英国人John Westell氏が５０５の設計者である。Westell氏はその時のコンクールでは選外であったがCoronetをみたフランス人から当時フランスで普及していたCanetonの替りになるよう艇を設計してほしいとの依頼を受けた。Coronetを改造して新たに設計したのが現在の５０５であり、第１号艇はフランスで進水した。

フランスではCaneton級から移ってきた人々がほとんどであったため、直ぐに協会が発足し、1955年ごろから英国で普及しはじめたのを口火に英連邦その他の世界各地に広がりはじめた。最初からしっかりとした協会が発足したのが現在の国際交流の基盤をつくりあげた。

美しいハル（艇体）ライン　ー　英語では船を<SHE>と云うが、まさに<She is beautiul!>につきる。曲線が文字には現わせない格好の良さを持っている。セールもパワフルでスピンネーカーをあげての３枚張りは強風下で〈ダイナマイトセーリング〉と呼ぶにふさわしい。ルールによる規制が少ないクラスなので工夫と創意がスピードもうみ、スリルに魅せられたセーラー達がとりこになっていく。

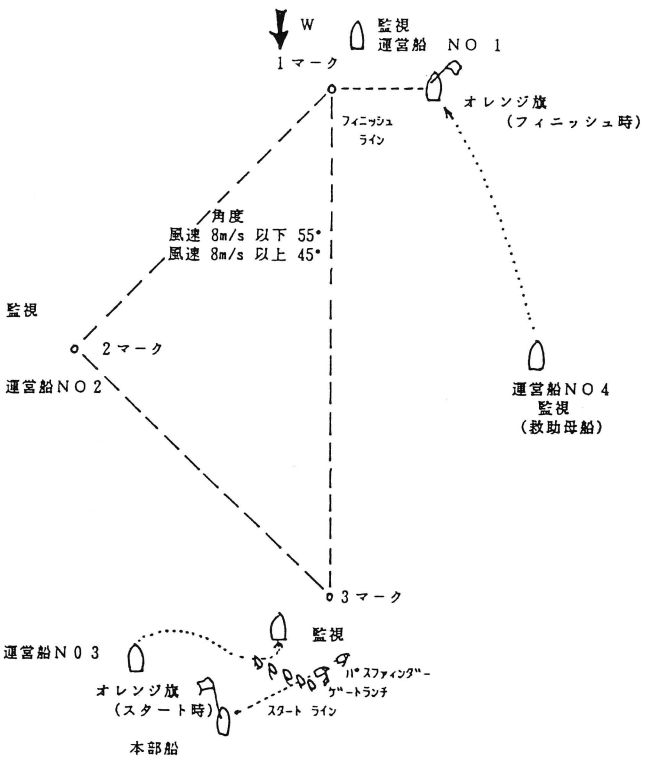
ほとんどの５０５セーラーはアマチュアのサンデーセーラーである。すべてのスポーツがプロ化していく中でアマチュアスポーツとして５０５が存在するために、オリンピック艇種として推薦されても協会自ら辞退するなど国際的に健全なクラス活動を推進している。

【レースコースの説明】

コースは風の強さに応じて図のような３角形で、レースはこのコースを指定されたとりに廻航していく。いわゆるオリンピックコース＋トライアングルという５０５コースである。

スタートはゲートスタートで行われる。ラインスタートと違い、バスファインダーという前のレースで１０位になった艇がポートタックのクローズホールドで走り、その後ろを各艇スターボードタックで横切ることによりスタートが行われる。

海上運営船 配置図 （ゲートスタート）



備考　マーク間距離

１日１レースの場合

スタート ――	３マーク	０．２マイル
３マーク ――	１マーク	１．８マイル

１日２レースの場合

スタート ――	３マーク	０．２マイル
３マーク ――	１マーク	１．５マイル

マーク変更の基準　平均風向（振れの中心）が、２０°以上となりその後も振れ戻らないとき。

通常のコース　：Ｓ－１－２－３－１－３－１－２－３－Ｆ
数字旗１を展開したコース　：Ｓ－１－２－３－１－３－Ｆ

デンマークのエルブストロームを除いては英／仏にオーストラリアを加えた３ケ国で優勝を争っていた時代が２０年続いた。これは普及艇数の割合からいっても当然の結果かもしれないが、1979年にUSAのテイラーが優勝してからは、毎年異なる顔ぶれながらUSAが４連覇した。艇やフィッティングは複雑なシステムになり、高価格なオリンピック艇種を思わせるクラスの発展に疑問をもった者も多かったがそれを主張するかのごとくにオーストラリアのキルウッドが1983年にまったくシンプルな艇で優勝した。前年度チャンピオンのブラッチフォードも同じ路線である。

〈５人のワールドチャンピオン〉

国際５０５級チャンピオンリスト

年	スキッパー／クルー	国名	開催地
1956	J.Lebrun/P.Harincouck	フランス	La Baule, France
1957	P.Elvstrom/P.Poullain	デンマーク	La Baule, France
1958	P.Elvstrom/P.Poullain	デンマーク	La Baule, France
1959	M.Buffet/P.Wolff	フランス	Cork, Ireland
1960	M.Buffet/P.Wolff	フランス	La Baule, France
1961	J.Cornu/D.Gouffier	フランス	Weymouth, England
1962	K.Paul/Noakes	イギリス	La Baule, France
1963	B.Price/C.Hough	オーストラリア	Larchmont,USA
1964	J.Parrington/C.Hough	オーストラリア	Cork, Ireland
1965	D.Farrant/R.Farrant	イギリス	Tangier,Morocco
1966	J.Hardy/M.Wirnhall	オーストラリア	Adelaide,Australia
1967	B.Moret/R.Morch	フランス	La Baule, France
1968	M.Troudel/F.Lanaverre	フランス	Kiel, Germany
1969	L.Marks/V.Deschamps	イギリス	Argentina
1970	L.Marks/V.Deschamps	イギリス	Plymouth, England
1971	D.Farrant/R.Farrant	イギリス	Santa Cruz, USA
1972	N.Loday/Fedorenko	フランス	Helsinki, Finland
1973	P.White/J.Davies	イギリス	Hong Kong
1974	B.Pajot/J.Pajot	フランス	Marstrand, Sweden
1975	J.Loveday/L.Dann	イギリス	Bermuda
1976	P.Colclough/S.Jones	イギリス	Toronto, Australia
1977	P.Colclough/P.Brown	イギリス	La Rochelle,France
1978	P.Colclough/P.Brown	イギリス	Denmark
1979	S.Taylor/D.Penfield	アメリカ	Durban,S.Africa
1980	S.Benjamin/T.Edmundson	アメリカ	H.Island, England
1981	E.Bixby/C.Lewis	アメリカ	SF, USA
1982	G.Knapp/C.Lewis	アメリカ	Cork, Ireland
1983	T.Kyrwood/R.Crick	オーストラリア	Adelaide,Australia
1984	D.Blatchford/T.Wood	オーストラリア	Gromitz,Germany
1985	?	?	Enoshima、Japan

■今大会へ来日予定のワールドチャンピオン達■

Paul　Elvstrom：ポール・エルブストローム

"Great Dane"、"ヨットの神様"とはデンマークのポール＝エルブストローム氏のことである。氏は1948年にロンドンオリンピック・一人乗艇で金メダルをとり、その後ヘルシンキ、メルボルン、ローマと４連勝を飾った。東京オリンピックではデンマークチームのコーチとして来日したが、当時の日本チームの強化のために一役かってくださった。メキシコへは二人乗艇（スター級）で参加し４位、ミュンヘンではフランスチームとの抗議が原因でレースを途中で棄権してしまい、それから１２年間オリンピックから遠ざかることになった。

ミュンヘンの後、沈黙の中で引退したかとまでいわれていた氏であるが、1982年に娘のトリーネをパートナーにして双胴艇（トルネード級）で再びレースシーンに蘇り、ロ

ポール＝エルブストローム

ス五輪では初の親子での出場を成しとげ、成績は４位と惜しくもメダルを逃したが、世界中のセーラーに神様の復活を喜ばせたばかりである。

氏は古くから505級を愛していた一人であり、過去に世界選手権にも出場しており、第２回／第３回(1957-58)では優勝しているし、1967年のオーストラリア大会で地元のSir. James Hardyと優勝を争い、惜しくも２位に甘んじた。しかし氏の505を愛する心は変ることなく、1985年の江の島での大会に招待選手として参加することになった。今回のパートナーはヤコブ＝モラーという1979年に505世界選手権で２位にはいっているトップセーラーであり、今大会ではひょっとしたら優勝するのではないかとの強豪チームである。

Peter Colclough：ピーター・コルクロー

数多い５０５セーラーの中で最もスマートなワールドチャンピオンで、スピードよりもまったくスキのないタクティクスをその身上とし、唯一、1976-1978年３年連続でワールドタイトルをものにしている。

クローズホールドではブリベンドリグのイギリス式セーリングを使いこなし、またフリーでもより大きなスピネーカーを存分に使いこなす。全く、うまいセーラーである。

ピーター＝コルクロー

世界一の大きなフリートのイギリスで常勝の彼は８月にコーンウォールで開催されたヨーロッパ選手権でも優勝しており、きっとワールドでもプロフェッショナルなくうまい〉セーリングをみせてくれる。

Marcel Buffet：マルセル・ビュッフェ

今から２１年前の東京オリンピックではＦＤの選手として江の島に来たことがある彼もエルブストロームと同世代。

マルセル＝ビュッフェ

1959-60と２回ワールドタイトルをものにしている。長い間フランスのナショナルコーチを勤め、６０才にして今でも現役のナショナルチャンピオンを狙う彼のセーリングは特に強風でテクニックが発揮される。似顔絵書きを特技とする彼はいつでも紙と鉛筆を持っている。

Lake Macquarie Fleet：マコーリー湖フリート

現在世界最強のフリートがオーストラリアのマコーリー湖フリートである。毎週末行われるフリートレースのトップ５がそのまま世界レベルで、ここの２年感ワールドタイトルを独占している。

83年オーストラリア・アデレードで開催されたワールドでは実にここのフリート４艇が最後まで優勝争いをし、結局、テリー＝キルウッド／レッジ＝クリーク組がチャンピオンになった。彼等はコンビを組んで18年、５０５一筋という５０５ファミリーの一員である。シンプルな艇で野性的なセーリングを身上とする彼はボートビルダーである。

84年ドイツで行われたワールドでもこのフリートから数艇が参加したが、その中で若手のディーン＝ブラッチフォードが栄冠を勝ちとった。彼は83年のワールドには父とのペアで50位にも入らなかったが、同じく若手のトム＝ウッドと組んでからは急成長株、今年の走りが楽しみである。

今年はこのフリートから何と９艇が参加予定で、85年オーストラリアナショナルチャンピオン、又昨年の太平洋選手権覇者であるピーター＝ヒューソンも含まれている。

ワールドチャンピオン以外にも強い選手が出てくる。アメリカからは強風では世界一速い男といわれるハワード＝ハムリンが来る。彼も５０５のビルダーで世界で２番目に高い高価な（ちなみに１番はリンゼイ／ウォーターラット米国）５０５を建造している。サンフランシスコの強風できたえ抜かれたそのスピードはあのベンジャミンが世界一と言うほどすごい。

スエーデンのイービー＝ローゼンは少数精鋭の国がら、オールラウンドに速い。スエーデンの様に地形がいりくんだ湾を利用してのセーリングではボートハンドリングがよくなるのもあたりまえである。常にトップ５に残る実力を日本でも発揮してくれることだろう。

香港からは現国際５０５協会会長のエリック＝ロッキヤーがくる。彼も５０５に２０年以上のベテランセーラーであり、８月には英国まで秘密練習を行いにいった。73年の香港でのワールド以来極東に５０５ワールドがきたことはなかったので、今回はおおいにはりきっている。

そして日本からは、79年に４７０級ワールドタイトルをとった甲斐／小宮組が今回はそれぞれスキッパーとなり、甲斐／壁谷組、小宮／菊池組として参加する。壁谷は82、84のワールド経験があり、甲斐、菊池は81年に参加している。また、個性的な関口／森川組も強風が得意で、83年のオーストラリアでのワールドの経験がある。日本の５０５の元祖である埜口はペアを組んで４年になる斉藤愛子と参

加する。このペアは女性スキッパーながらも男性ペアと互角に走っており、国内のレースでは負けしらずである。若手のホープである鵜沢／森本組も強風が得意なのでその爆発力が楽しみである。そのほかに約１３チームが予選を勝ぬいて日本代表になっている。

【流　行】

５０５のフィッティングは殆ど自由である。このため、乗手の個性、体格などが大きくフィッティングに影響し、地域により様々なセーリング方式が生まれている。

【セーリング方式】

Europian：

マストをベンドさせるとリグのテンションはどうしてもゆるんでしまう。そこであらかじめマストをプリベンドさせ、そのマストカーブに合ったラフカーブのセールをセットする。中風では少しマストを堅くすればメインセールのリーチはタイトになり、リグのテンションはゆるむことなく最大のパワーが得られる。強風では更にマストをベンドさせて、セールを浅くする。そしてリグのテンションが若干ゆるむことによりサイドベンドを増し、パワーを逃がす。これがいわゆるイギリス式セーリングである。

彼等は体格が大きく体重も重い。こうしていわゆるオーソドックスなパワフなセーリングが生まれた。マストのプリベンドはスプレッダーの振り角度とリグテンションで行う。マストのサイドベンドはスプレッダーの長さとクルーの体重に合せ、サイドステーとトラピーズのマストの取出し口を高くして調節する。一般にサイドステーの位置はジブステーより300mm-500mm上、そしてトラピーズは更に上になる。

センターボードは最初は固定式だったが、現在はアメリカタイプのジャイビングボード（帆走中風上にセンターがジャイブする）が主流となってきた。

American：

６年前のワールドで台頭してきたのがアメリカ式セーリングで以降４年間ワールドタイトルを保持してきた。　マストベンドとリグテンションを切り離なし、リグテンションをかけるとマストがベンドしないようジブステイとサイドステイの取り出し口を同じ高さにした。メインセールはプリベンドさせない分だけラフカーブを特にスプレッダーから下でとり浅くした。中風ではマストを全くベンドさせずにパワーを出し、強風ではリグのテンションを強くしながらマストをベンドさせ、ジブをサギングさせることなしにパワーを逃がすことができる。サイドステイの取付位置が下がることにより増えるサイドベンドはトラピーズワイヤーを従来どおり高くするか、上部をより堅いセクションに変えて対処する。

センターボードは殆どがジャイビングボードで、タイトリグに耐える最新材料をふんだんに使用し、高度の製造技術を駆使して作られた強固なハル、リグコントロールに必要な強力なステイアジャスター、下部のマストベンドを防せぐストラット式のベンドコントローラー、そして堅いマストにフィットした浅いセール、これらがアメリカ式に不可欠なものである。

Australian：

アメリカ式セーリングが台頭して問題になったが船価である２００万円をこす５０５はなかなか普及しにくくなった。そんな時に非常にシンプルなオーストラリアのマコーリー湖式セーリングは注目をあびだした。数字で船のスピードを管理する、そんなアメリカ式に比べ、風が吹いてきたらブームをデッキにつくまでマストをたおしてという、オーストラリア式セーリングはまったく逆行している。

５０５はどちらかというとオーバーパワーの船である。ハルが堅く、センターも堅いとどこもパワーを逃がすところがなく、ハンドリングしにくい。どちらかというと体重の軽いオーストラリアンはそこでルーズリグを考え出した。彼等はプリベンドリグを使うが、そのシステムは全く簡単で、マストゲートの前だけでなく後ろにも入れる木のくさび、柔らかいマストをスプレッダーの振角度でコントロールする。メインセールはラフローチを十分大きくし、プリベンドとマッチしている。微風ではテンションをかけマストをたてるが、オーバーパワーになる程マストをたおしていき、そしてバングのテンションをかけていく。こうして上ったりおとしたり動物的なスピードコントロールで走らせていく。センターボードは固定式である。

【レースのみどころ】

５０５を初めて見る方ならば艇の美しさ、スピード感、迫力、やさしさ、大会の明るい雰囲気をみつけていただけたらば良いと思う。海外からの５０５ファミリーはヨットが好きで暇さえあればボートの話かもしれないが、本当はビール一杯で陽気になってしまう仲間なのである。

レーシングディンギーに興味のある方ならば各国から運ばれてくる艇やフィッティングを実際に自分の，目で，見てあるくのが楽しい。シューター付きの艇、木目の美しい艇、わけのわからない機器が付いた艇etcエントリーリストと合せてトップレーサー達の艇を捜しては研究するのも興味がわく。ハンドリングの仕方やその背後にある理論を学ぶことは貴重である。

家族でセーリングを楽しむ雰囲気を味わうのにも良い機会ではないかと思う。パパさんセーラーも多し、若いセーラーは６－７歳からヨットに乗っている者が多い。日本は極東といわれるだけあって交通費が高くつくために家族をつれての参加は少ないのが残念である。しかし、彼等と話をすることで欧米諸国でのセーリングライフに触れる機会が持てるのではないだろうか。

さて、せっかく日本でやるのだから日本選手が勝たなくてはと考えるが、常に日本選手の順位だけを気にしていてはレースを半分も見ることができない。世界の強豪あいてに日本選手がどこまでがんばれるか、国を問わずに華麗なテクニック、ガッツに注目していただきたいと思う。

江の島での規模の大きい国際イベントとしては東京オリンピック以来のことになるのでこの機会に５０５，そしてセーリングに親しんでいただきたい。